

中国の高等教育の大衆化と広がる女性間格差—誰が名門北京大学に入学したのか？

大浜 慶子（中国）

めざましい経済発展を遂げる中国では今、高度経済成長期の日本をも凌ぐ高等教育大衆化の波が押し寄せています。2002年には粗入学率15%を達成、トロウ学説のマス段階へ突入し、2011年には27%となりました。普通高等教育機関進学者数は1999年から2011年にかけて159万7千人から681万5千人へと4倍以上に、普通高等教育機関数も1071校から2409校へすさまじい勢いで増設されています。学歴社会の到来により「応試教育」（受験教育）は以前にも増して激しさを極めていますが、女性にとって朗報も舞い込んでいます。2009年、全国普通高等教育機関の女子在学者数は1082万6千人に達し、その比率は50.5%と中華人民共和国成立後初めて女子の数が男子を上回り、性比が逆転しました。過酷な「高考（*gao kao*）」（全国統一入学試験）でも各省首席で合格した女子学生「女状元（*nu zhuang yuan*）」が数の上で男子より圧倒的優位に立ち、大学の「陰盛陽衰（*yin sheng yang shuai*）」現象が話題を呼んでいます。専門家も大学大衆化の受益者は女性だったと述べています。「女状元」の多くは名門北京大学や清華大学へ進学しますが、果たしてどのような背景をもつ学生が最高学府に入学しているのでしょうか。

これについて劉雲杉（LIU Yunshan）、王志明（WANG Zhiming）が改革開放後（1978年～2005年）北京大学に入学した新入生の膨大なデータを収集し、大変興味深い研究結果を報告していますⁱ。劉らが新入生の属性を地域別、都市農村別、階層別に分類し多角的かつ時系列的に克明なジェンダー分析を行ったところ、浮かび上がってきたのは思わぬ事実でした。改革開放後、特に1990年以降鮮烈な断層が現れたのは都市農村間でした。北京大学の入学機会に関し、1978年から一貫して40%以上と高い割合を保っていたのは都市男子で、逆にわずか数%と低比率で底辺をさまよっていたのは農村女子、この2集団は改革開放後変化の見られない集団でした。変化がみられたのは農村男子と都市女子です。文革期7割以上を占めていたといわれる北京大学の労農階級出身学生は改革開放直後激減し、農村男子、都市女子の2集団は80年代から90年代にかけてどちらもほぼ20%台と拮抗、最高学府の限られた入学機会をめぐる、せりあっていました。ところが1994年から2年間で都市女子が一举に10ポイント近く急上昇、都市男子と小差に迫ります。それと入れ替わるように農村男子は下降線をたどり農村女子に接近するのです。全国統計でも1990年代半ば、大学の女子比率が急伸する動態を確認することができます。これはなぜでしょうか。以下の複合的な要因が考えられます。

まず1992年にスタートする社会主義市場経済政策とグローバル経済の接合により先鋭さが増す都市農村の二極分化およびそれを基底とする新たな階級・階層の興隆という現実が大学教育に連鎖し、組み込まれてきたという事実です。もう一つの要因は計画出産政策であり、90年代半ば最初の一人っ子世代が大学へ参入しました。計画出産政策は都市部の家族構造

を変革し、中国人の伝統的男系家族観をも改め、都市では性別を問わず子どもの教育達成への期待が高まっています。一方、農村では子どもの数が多く、男児優先の意識がまだ根強く残っています。加えて無償だった授業料も1997年以降すべての大学で納入が義務付けられ、学費は年々高騰し、都市農村の貧富の格差は広がり、経済面でも農村出身者は不利を被っているのです。兄弟の学費を稼ぐために女兒が働かされる光景もしばしば見られます。

北京大学の在学者（中国の高等教育についてもいえることですが）の性比が近年均衡するという実相は、都市のめぐまれた女子が多くの入学機会を手にして上昇移動し、逆に農村の男子が下降移動してもたらされた結果であり、劉らはこのようにして達成されつつあるジェンダー公平を「限定された進歩」と呼んでいます。農村男子よりさらに劣悪な環境に置かれている農村女子の存在も見過ごすことはできません。

全国の高等教育の女子比率は男子を上回り、今も統計記録を華々しく更新中です。その一方で、分断された女性間格差は音もなく広がっています。前者は可視化され、後者は可視化されません。これは中国社会の発展の光と影の二面性であるとともに、ある意味で世界の発展の様態をも同時に映し出しているのです。



北京大学西校門（出展：京城名校參觀會議服務網）

ⁱ 劉雲杉 王志明 2008 「女性進入精英集体：有限的進歩」『高等教育研究』 Vol.29 No.2